

デイオゴ・デ・コウト『アジアのデカダ集』 —— 解題と若干の翻訳 ——

中野岡真
砂澤 下
明丈美裕
徳二子之

本稿は、現在進行中の特定共同研究「モンズーン文書・イエズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究」(代表松方冬子)において、これまでも南欧語史料を用いてアジア史研究をおこなってきたメンバーが、共同研究として継続していくのに相応しい課題として、ポルトガルの編年史家デイオゴ・デ・コウトDiogo de Coutoの『アジアのデカダ集*Decadas da Asia*』を選び、本邦ではほとんど知られていないこの作品の概要紹介と若干の内容翻訳を試みるものである。将来的にはこの一五二〇年代から一六〇〇年までの、アジアのポルトガル人の活動とそれを迎えた諸現地政権についての長大な編年史の章要約に取り組む予定であるが、今回は紙幅の関係で、そのごく一部を紹介することにした。すなわち解題(真下担当)と本文中のマヌエル・セヴェリン・デ・フアリアによる序言(岡担当)ならびに第一書である「第四デカダ」の章翻訳(岡・野澤担当)から成る。翻訳を含む原稿全体を中砂が通読し、適宜必要に応じて改変した。なお、日本関係の記述が登場し始めるのは一五四〇年代を収録した「第五デカダ」以降である。本稿で翻訳する「第

四デカダ」(第一巻に相当)は主にインドと東南アジアにおける現地政権との駆け引き、戦闘に関する記録である。

一 解題

コウトの著作については、一八世紀の書誌学者マシャードが整理している⁽¹⁾。以下ではこれを踏まえつつ、『アジアのデカダ集』に重点を置き、最近の研究成果も加えて記述する。紙幅を考慮し、他の著作については書名と版本の情報を記すにとどめる。

『アジアのデカダ集』 *Decadas da Asia*

本書は、ジョアン・デ・バロスJoão de Barros(一四六九—一五七〇)の歴史書『アジアのデカダ集』の続編としてコウトが著した、インディア領(エスタード・ダ・インディア)の歴史書である。そのフルタイトルはバロスのそれをほぼ踏襲した『ポルトガル人が東洋の陸と海での征服と発見に際して行なった数々の行為に関するアジアのデカダ集』であ

る。一六世紀前半から一七世紀初頭にかけてのアフリカから東アジアに至るインディア領各地の動向を記録したもので、特にインド、東南アジア、西アジアについては、現地語の史資料にはない情報を提供する同時代史料として高い価値を有する。

本書はその書名のとおり、「デカダ decada」（ここでは「十書」の意）と題する各巻の集合体である。一五九五年、国王フィリーペ一世によってコウトがインディア領修史官に任じられた時、バロスの第四デカダは未完だったため、本書はその欠を補うべく第四デカダを起点とし、第一二デカダまでの全九デカダから成っている。各デカダはバロスのそれと同じく、一〇の「書 libro」から成っており（最後の第一二デカダの伝本は五書のみ）、各書は複数の「章 capitulo」に細分される。ただし要約版のみが伝わる第八デカダと第九デカダは、書の区分を備えず、章のみによって構成されている（原本が散逸し後代に編纂された第一一デカダも同様）。各デカダの一〇書構成がおおよそ貫徹しているところにはコウトの様式意識を認められるが、各書が含む章の数や分量については差異が著しい。なおコウトの原稿の送付先であり、その出版に尽力した義兄アデオダートが出版までに様々な改作を施し、章の構成も改めていたことが明らかになっている [Seabra 2019: 120 ff.]。版本の構成や内容には著者コウトの意図しなかった改変が含まれていることには要注意である。

青年期以降の人生の大半をインドのゴアで過ごしたコウトは修史官に任じられる前から歴史書の執筆を進めていた（一五八九年の国王宛書簡で彼はインディア領修史官の任務を請願した）。そのため彼が最初に着手したのは、後出のコウト伝にもあるとおり、当代に最も近い時期をカバーする第一〇デカダであった。その後第四デカダから第七デカダまでが順次執筆されるが、それ以降のデカダは必ずしも時代順に執筆され

たわけではない。また原稿が散逸したり盗難に遭ったりしたため、再稿や要約稿をコウトが別途執筆したデカダもある。さらに本国に送られた原稿がすぐに出版されたわけでもなく、コウトの没後に公刊されたデカダも複数ある。かくのごとくに複雑な本書成立の詳細は、以下、各デカダについて記すとおりである。

『デカダ集』の複雑な性格はその典拠についても当てはまる。コウトはインディア領トルレ・ド・トンボ（公文書保管庫）の館長として、各地からゴアに送られてくる公文書をこの歴史書の執筆に活用できる立場にあった。また関係者からの口頭の証言も彼の著作の素材となった。一方カスタンエーダ⁽²⁾やコレイアの歴史書⁽³⁾、ラムーズイオの旅行記集成⁽⁴⁾、オルタの本草学書⁽⁵⁾など、インディア領やヨーロッパで執筆された公刊・未公刊の著作も情報源となっている。ただし、クルスによれば、引用の過程で生じた書写上の錯誤によって典拠の原意が誤って本書に伝わっている事例も数多い [Crus 2019: 111-114]。さらにクルスの言を重ねれば、コウトの著作は「バッチワークの毛布」といふべき、推敲を欠いた未完のスケッチのごとくであり、念入りに仕上げられたバロスの著作とはまるで異なるという [Crus 2019: 101-102]。『デカダ集』の情報源については、ロウレイロの精緻な研究 [Loureiro 1998] によって筋道が付けられているので、今後徹底的に取り組まれるべき課題である。

さて『デカダ集』全九デカダをカバーする唯一の版本は一七七八年から一七八八年にかけて王立印刷所から全一四冊および索引一冊で順次刊行された。これはバロスの『デカダ集』全四デカダおよびバロス伝（ファリア著）・索引と併せ、都合二四冊にわたるシリーズをなす。この版本は一九七〇年代にリプリントが出版されたこともあり、広く研究者に流布している（以下「通行版」と呼称する⁽⁶⁾）。通行版は全体としては二次的な編纂物であるが、第一〇デカダのようにこの版で初めて公刊されたデ

カダも含んでいるため、一次的な史料価値をも有する。なお本稿で訳出したフアリア著のコウト伝および章題の翻訳は、通行版を底本とした。

通行版以前に、コウト『デカダ集』全編の出版を試みた例があるが、これは第四デカダから第九デカダまでを含むに過ぎない（以下「一七三六年版」）。しかし第九デカダを初めて印刷に付した点では、この版にも一次的な史料価値がある。

以下に各デカダが記述する年代（デカダ名に後続して角括弧内に示す）、執筆時期、初版や出版の経緯などの書誌的情報を、おもにロウレイロの研究を参考にしつつ概述する [Loureiro 1998]。

第四デカダ「一五二六～一五三六」一五九五年末から一五九六年にかけて執筆された。コウトが下記第一〇デカダに続いて、二番目に着手したデカダである。原稿は一五九八年に本国に発送され、一六〇二年に印刷の認可を得て同年中に出版された [初版 Lisboa: Pedro Crasbeck, 1602]。初版本を底本とした批判校訂版が出版されている⁽⁸⁾。

第五デカダ「一五三六～一五四五」一五九六年から一五九七年末までに執筆された。原稿は一五九八年に本国に発送され、一六〇二年に印刷の認可が下りたものの、初版の刊行は遅れた [初版 Lisboa: Pedro Crasbeck, 1612]。なおライデン大学所蔵の手稿本（一七世紀）は、章の構成も含め、初版や通行版とは異なるテキストを呈している⁽⁹⁾。

第六デカダ「一五四五～一五五四」一五九七年に執筆。原稿は一五九九年に発送されたが、様々な検閲機関のもとに留め置かれ、出版は遅れた [初版 Lisboa: Pedro Crasbeck, 1612]。一六一四年の刊行年を付した扉を備える版本もある。これは初版の刊行後、クラスベク印刷所の火災で扉の葉が消失したことにより、一六一四年に印刷された新たな扉が用いられたためである（後出のコウト伝を参照）。

第七デカダ「一五五四～一五六四」一六〇一年ごろに執筆は完了し、

同年発送された。しかし原稿を積んだナウ船が本国に向けての航海中、オランダの海賊に拿捕されたため、原稿は行方不明となった。コウトは手もとに残っていた資料をもとに、新たな原稿を執筆し、一六〇三年末にこの新稿を本国に発送した。出版の認可が得られたのは一六一三年、刊行はさらにその三年後であった [初版 Lisboa: Pedro Crasbeck, 1616]。

第八デカダ「一五六四～一五七二」一六一五年までには執筆が完了していたが、同年、コウトの書齋が盗難に遭い、本デカダおよび先に完成していた第九デカダの原稿が失われた。コウトは両デカダの要約稿を作成し、一六一六年初頭にこれを完成させた。要約稿ゆえか、両デカダは「書」の区分を持たず、「章」のみで構成されている。本デカダの出版は著者の死後、一六七三年のことであった。 [初版 Lisboa: Joao da Costa & Diogo Soares, 1673]。なおポルト公共図書館とマドリッド国立図書館には、七つの「書」から構成される、より大規模なテキストを備えた本デカダの写本が所蔵されており、両者を底本とした校訂本も出版されている⁽¹⁰⁾。これらの異本の祖本については、コウトの遺族が保管していた草稿を、一六二六年、当時のインディア領副王にしてコウトのパトロンでもあったフランシスコ・ダ・ガマが本国に発送したという「インディア史の第八デカダ」にあたる可能性が指摘されている [Loureiro 1998: 271-272]。

第九デカダ「一五七二～」一六一三年までには完成していたが、一六一五年、第八デカダとともに盗難によって原稿が失われたため、要約稿が急遽作成された。この要約稿は第八デカダ要約稿とともに、一六一六年に本国に送られたが、その出版は第八デカダよりもさらに遅れ、一七三六年版の一部として刊行されたのが最初の版本である。但しそのテキストは第三二章（一五七五年頃の記事）の途中で中断しているし、現

存する部分にもテキストの不備が認められる箇所がある [Loureiro 1998: 295-296]。

第一〇デカダ [一五八〇〜一五八八] 一五九九年ないし一六〇〇年に執筆を完了しており、本デカダは『デカダ集』のうちコウトが最初に仕上げた部分である。原稿は一六〇〇年末、本国に発送されたが、何らかの理由で印刷されないまま放置された。本デカダは一七三六年版にも結局収録されず、その公刊は通行版を待たねばならなかった。コウトの自筆原稿はブラジル国立図書館とトルレ・ド・トンボ文書館に分散して伝世しており、これに基づく批判版の作成が待たれる [Garcia 2019: 37]。

第一一デカダ 今日まで本デカダの伝本は知られていない。散逸した本デカダについて通行版は、様々な資料から素材を借用して作成したテキストを第一一デカダに仕立て上げている。これにはもちろん第二義的な史料価値しかないが、それでもコウトの著作が活用されている部分はある。通行版第一章から第四章までの部分は、コウトの別著作『ドン・パウロ・デ・リマ・ペレイラ伝』(一六一一年完成)のテキストを借用したものである。一五八九年に生じたサン・トメ号の難船で命を落としたペレイラの事績に関する記事がそれにあたるが、これは実は本デカダの当初の原稿を転用して編まれていたものである。散逸したテキストは、かくのごとく複雑な経緯を経て、通行版の補充テキストに還流したわけである。

第一二デカダ [一五九七〜一六〇〇] 本デカダは五書から成る。コウトは一六一一年にこれを執筆中であり、死去する一六一六年までに第五書までの原稿を本国に発送した。出版の認可が得られたのは著者の死後、一六二八年のことであったが、これは一六四五年、当時パリにポルトガル大使として駐在していたヴァスコ・ルイス・ダ・ガマ(フランシ

スコ・ダ・ガマの子)に献呈するべく、同地で活動していた著述家マヌエル・フェルナンデス・ヴィラ・レアルによって刊行された [初版Paris: Livraria d'Alcobaca, 1645]。

コウトのその他の著作を、散逸したものも含め、後出のコウト伝等の史料から判明する限り年代順に列挙すれば以下のごとくである。

『老練なる兵士』 *O Soldado Prático*. (当初稿と改訂稿の二種あり) [ルジアダス注解] *Comentário d'Os Lusadas*. (伝本なし)

『勇敢なるカピタン、ヴァスコ・ダ・ガマに生じた出来事および彼のすべての息子たちに生じた出来事のすべてに関する小論』 *Tratado de todas as cousas sucedidas ao valeroso Capitão D. Vasco da Gama, (...) e das cousas, que sucederão nella a todos seus filhos*.

『インディア史梗概』 *Ephlogo da História da Índia*. (伝本なし)

『エチオピア王国史』 *História do Reyno de Ethiopia*, (...). (伝本なし)

『ドン・パウロ・デ・リマ・ペレイラ伝』 *Vida de D. Paulo de Lima Pereira*.⁽¹³⁾

以上の著作の他、ファリアによると「二冊の大歌集」があり、「インディアの交易」に関する書物も計画されていたが未完に終わったという。

書籍とは別にコウトは、総督・副王の着任やその他のしかるべき機会に行われた演説文起草した⁽¹⁴⁾。またコウトが発信した書簡も伝世している [Garcia 2019: 38-39]。

二 第四デカダ冒頭に掲載されたファリアの序言(翻訳)

ディオゴ・デ・コウトの生涯―インディアの修史官にして、そのトルレ・ド・トンボの長―マヌエル・デ・セヴェリン・デ・ファリアによる⁽¹⁵⁾。

博学の人々の著作は、そのあらゆる箇所において、作者の人となり

(181) デイオゴ・デ・コウト『アジアのデカダ集』(真下・岡・野澤・中砂)

感じさせるような力を秘めているものである。それは、「人々に」その人に会ってみたいという熱望を引き起こすにとどまらず、たとえ離れたところにあっても、なんとか直接の通信を試みたいという願望へと導くものである。これらの願望は私に、この王国から書翰によって、インディアにあるディオゴ・デ・コウトに好誼を求めるに至らしめた。そして今、同様に彼の事績から私が得た情報を記録する責務を帯びている。私が彼に対して負うものを、部分的にでもこの責務において還すべきであると考え、この王国中に資する一つの著述をしたためる。というのも彼は公職において多大な奉仕を捧げ、さらなる優れた荣誉に値する人物として認識されるべきであることによる。

ディオゴ・デ・コウトは、ともに貴族であるガスパール・デ・コウトとイザベル・セラオン・デ・カルヴォスの間の息子にして、母はヴァスコ・セラオン・デ・カルヴォスの娘、それによりディオゴ・デ・コウトはイエズス会の著名な説教師にして偉大なる宗教家であるパードレ・ルイス・アルヴァレスの又従弟にあたる。ディオゴ・デ・コウトは一五四二年、リスボンに生まれた。⁽¹⁷⁾当時彼の父ガスパール・デ・コウトは国王ドン・マヌエルからルイス王子に臣下として与えられ、王子に仕えていたことによる。それにより、ディオゴ・デ・コウトは適齢に達すると、「ルイス」王子に仕えることになった。ルイス王子は彼にリスボンで学ぶことを命じ、一歳より、イエズス会がヨーロッパにおいて創設した最初のコレジオであるサント・アントン学院の最初の学生たちに混ざって文法を学んだ。ラテン語における彼の教師は、高名な人文主義者にして『文法書 *Arte da Grammatica*』⁽¹⁸⁾の著者パードレ・マヌエル・アルヴァレスであった。この書は今日、イエズス会の管轄下にあるすべての大学、学院で読まれている。「コウトは」⁽¹⁹⁾修辭法をパードレ・シプリアーノ・ソアレスに学んだ。⁽²⁰⁾彼は『修辭法 *Rhetorical*』を編集したが、そ

れはイエズス会の学院で教えられるためであった。「知への最初の熱意と動機は師がすぐれていることにある」という格言が本当だとすれば、それはコウトの仕事の多くにも当てはまる。それゆえ、ディオゴ・デ・コウトの作品には、その生まれつきの才能に加えて、かくも傑出した、あの時代の博学者たちに鍛錬された事実が大いに見受けられる。

人文学の勉強を終えると、ディオゴ・デ・コウトは学業を中断した。というのも、その頃はまだリスボンでは人文学以外は教えられていなかったからである。かくして彼はルイスに仕え続けた。それからしばらくして彼の主人（ドン・ルイス）はその息子であるドン・アントニオにベンフィカの修道院で高僧フレイ・バルトロメウ・ドス・マルティレス⁽²²⁾のちのブラガ大司教の哲学講義を聴聞するよう命じた。「マルティレスは」ディオゴ・デ・コウトの中にすでに現れつつあった良質で天性の才能を見出したため、彼を「アントニオの」相弟子にすることにした。ディオゴ・デ・コウトはこの高名な師から教養科目を学び極めて優秀であったのにとどまらず、美德においても一層抜きこんでいた。それは彼がのちに兵士の身分にあつても、一市民としても生涯守り続けたような、その性質における謙虚さと慈しみ深さとして現れることになった。ほとんど一生にも渡るような、かくも長い年月の間の「インディア滞在の間」、その地の快樂もその習慣において彼を変えることはできなかった。⁽²³⁾ディオゴ・デ・コウトが哲学の履修を終えようとしていた頃、「ルイス」王子が没した。その喪失から間もなくして、彼の父の死という二番目のそれに見舞われた。かくして希望の進路は断たれ、身分を変えざるをえなくなった。学問を断念し、武芸の道へと進んだが、それは彼の精神が少なからず傾倒するものであった。その時期にはもはや東洋を除いては征服事業はなく、国王ドン・ジョアン三世はアフリカの領土を放棄し、スペインとの国境を守ることに執心していたので、「コウトは」他

のポルトガル人貴族の大半がそうしていたのと同様にインディアへと渡る決意をした。というのこの「征服」事業においては、かつてそうであったように、非常に短期間のうちに名誉と利益を得ることが可能であったからである。ただし、もし彼等が、インディアへ渡った初期の者達が持っていた気高さと徳に続くことを望み、古き良き成果を台無しにしてしまいかねない性的欲望や強欲に惑わされなかつた場合にはあるが。

ディオゴ・デ・コウトは一五五六年、「インドへ向かう」船に乗った。⁽²⁴⁾ インディアにおいて八年間兵士として奉仕し、格別の勇氣を見せて、その時代の偉業の多くに立ち会った。古代ギリシヤ人たちが弓矢で武装したアポロンの肖像を描くと同時に、学問の神として崇拜したことからも分かるように、教養は「武勲を」阻害するものではなく、むしろそれを助長するものであるという価値を証明して見せた。一〇年間継続して軍隊生活を全うした後、その功績に対する報償を受け取るために「ポルトガル」王国へ帰還した。⁽²⁵⁾ 彼がリスボンに到着した頃、俗に「すさまじきもの *grande*」と呼ばれたベストが猛威を振るっていたものの、すぐに恩賞を受け取ることができた。この恩賞を得てもなく、インディアへ出発し、そこでゴアの町においてルイーザ・デ・メロと結婚した。この女性には貴族で、その兄にはアウケティノ会士で、後に「コウトの」『デカダ集』の印刷事業に関わったバードレ・フレイ・アデオダート・ダ・トリニダード⁽²⁶⁾がいた。

戦いの役務から解放されて、平和な市民生活を送るうちに、自分の余暇を活用する余裕が生まれ、かつて学んでいた人文学を刷新したいという気持ちになった。これらの理由に加え、礼儀正しく身分も優れていたことから、彼はインディアではよく知られており、知識人、貴族、好奇心旺盛な者達、さらにはあれらの地域の異教徒の大公たちにまでも好かれていた。

ディオゴ・デ・コウトは数学、そして地理学にも優れていた。ラテン語、イタリア語をよく理解し、それらの言語や我等の俗語で詩を作ることもあった。「ポルトガルの俗語の詩作には」とりわけ秀で、抒情的かつ牧歌的な作品で、それらから「コウトは」、「哀歌」、「牧歌」、「歌謡」、「ソネット」、「一〇行詩」から成る一冊の大歌集を遺した。とりわけ我が国の偉大な詩人ルイス・デ・カモンイスと親交を結び、カモンイスは何度もコウトに相談し、その『ルジアダス』にも数か所で彼の意見が採用された。ディオゴ・デ・コウトはカモンイスの願いに従って、この英雄的な叙事詩に注釈をつけた。これらの注釈は五番目の歌まで達したものの、彼の身に生じた他の障害によって、すべてを終えることができなかった。とはいえ、これらの断片的なものが評価に値しないということはない。それらは現在、エヴォラの律修司祭ドン・フェルナンド・デ・カストロの手元にある。というのも、ディオゴ・デ・コウトの親友であったことにより、彼の叔父ドン・フェルナンド・デ・カストロ・ペレイラに託され、その所有にあつたからである。

ドン・フィリーペ一世が当「ポルトガル」諸王国の王位に就くことになり、この君は非常に思慮深く、その臣下にとつて等しく利益となることに常に目を向けられる方であつたので、我等のジョアン・デ・パロスが記し残した時代について、インディアの歴史「執筆」を継続するようお命じになられた。「パロスの」最初の三つの『デカダ集』はヨーロッパで広く受容され大いに称賛されたことにより、「新しい年代記も」『デカダ集』のタイトル、同じ形で記述されることを望まれた。そのような偉大な事業のために、国王はディオゴ・デ・コウトを任命された。たとえゴアに住んでいようとも、その人となりについての評判は遠くまで届いていたからである。国王はインディアの年代記家という称号を授けて、この作品を彼に委ねた。ディオゴ・デ・コウトは心を込めてそれを引き

受け、後述のように、その事業を完遂した。⁽²⁷⁾

彼が最初に着手したのは、「第一〇デカダ」であった。国王（フィリッペ）が宣誓され、あの（インディア）領にも認識された日から始めるためである。このように陛下が彼にお命じになったのは、トゥリオ（キケロ）が存命中に自分の行動が歴史に書き記されるのを見れば感じるであろうと歴史家のルセイオ（ルキウス・ルツケイウス）に告白した喜びよりも、あれらの（インディアの）地域で陛下が彼に仕えるその臣下に負うところのもの（軍功褒賞）を支払うためであった。

そういつた次第で、マヌエル・デ・ソウザの統治を最後として、「第一〇デカダ」が書き終えられた。国王はこの作品を高く評価し、自らの書状を以て、ディオゴ・デ・コウトを労った。そして、重ねて、ジョン・デ・バロスが着手しなかった、より前の時代に戻って各時代の『デカダ集』の歴史を継続するよう注文した。ディオゴ・デ・コウトはそれに従い、ごく短期間で、第四の時代を、同様に第五、第六、第七、第一、第二が作成された。

第八と第九の時代は一六一四年に終えられた。⁽²⁸⁾ 国王にそれらを送ろうとしているうちに、重篤な病に罹り、生命が危ぶまれた。この期間に、これらの二巻は彼の家から姿を消した。誰かが他人の仕事を利用するために持ち去ったのである。しかしながら神はディオゴ・デ・コウトに健康を取り戻すよう思し召された。その頃彼はすでに七二歳であった。また神は、彼に残されていた覚書と非常に恵まれていた記憶力をもとにふたたび二つのデカダで扱われていたことを集めるために健康と力を賦与した。そこから彼は一冊のみ作成し、そこで非常に重要なことのみを再現し、中でも最大限重要なことをより長く叙述した。かくしてその盗難はこのように解決された。そしていつか「盗まれた物が」現れるとすれば、その順序からも、取り扱い事項からも、明らかにその作者が公にな

ることであるう。

これらの『デカダ集』に関しては、今までのところ、第四、第五、第六、第七のみが刊行されている。第六に関しては、ある大きな災厄が生じた。というのも、印刷所で印刷が終わったところ、周辺の家々で火災が発生し、すべての巻が焼けてしまったのである。その中で、たまたますでにリスボンの聖アウグステイノ修道院⁽³⁰⁾に納められていた六冊のみが難を逃れた。それ以外の『デカダ集』はまだ日の目を見ておらず、ディオゴ・デ・コウトの死没にあたり、それらはその義兄であるパードレ・アデオダート・ダ・トリニダーデの手元に置かれたのであった。

ディオゴ・デ・コウトがこれらの『デカダ集』に関して守った様式は、非常に簡潔で素朴ながら豊富な叙述、それによって各人の行動が明確になり、あの地域のポルトガル人達の身の上に生じた不運な出来事、栄華の理由が明らかとなる。しかしながら、こちらの地域（ヨーロッパ）でも書かれることの真实性においては比肩しうる歴史書はあるとしても、『デカダ集の』物語の最重要の部分、すなわち東洋の大公たち、あれらの地域の民の習慣、遠く離れた地域、実際の地理学にもとづく状況を扱った部分こそが、多くの者に期待する恩恵（知的満足）を与えた。それらの『デカダ集』から明確に分かるように、そこでは彼より前に東洋のことについて書いた人がこれらの材料において犯した誤りに関しても、指摘されている。⁽³¹⁾ これらの情報の「収集」には、元々古代、現代の地理研究に極めて熱心であったのに加え、あれらの地域で五〇年以上にわたって滞在して得た経験は、彼には大変役立った。それらは、彼が軍隊生活を送った期間に、あれらの王国の交易を見出したことによる。そして後にあの（インディア）領の都であるゴアの市民として、そこで述べられる出来事の真実に辿り着くことができた。というのも、あの町にはあらゆる副王が滞在し、そこから総ての艦隊が出発し、休養のために戻って

くるのであるから。かくして「コウトは」実際に征服事業に参加する者達から情報を得ることができた。その町にはそれらを実際に目にした証人も「他に」にいたから、「彼等は」真実を話さざるを得なかった。これにはもう一つ別の理由が加わった。

それは彼がインディア領のトルレ・ド・トンボの館長の職にあったことによる。その職務は彼が副王マティアス・デ・アルブケルケからその公文書館を整備するように命じられた際、国王ドン・フリーペ一世より与えられた職位であった。そこには、あらゆる平和協定、訓令、書記局の記録、重要な書類等々が納められた。これらは従来、インディア領の事務長官やその他の役人たちの管理下にあった。「インディア領の歴史に関係するものは全て、そのオリジナルの情報が彼の元に集められることになった。それにより私たちは、それらをポリュビオスやサツルス⁽³⁴⁾テイウスにも劣らぬ信憑性のあるものとして知ることが出来る。この「真実の情報を得たいという」欲望は、彼等「ポリュビオスやサツルステイウス」をギリシャからイタリアへ、イタリアからスビア⁽³⁵⁾へと導いた。それらは、実際の州の位置、記さねばならないことを確認し、そこで生じたことに関する情報と扱うべきことを入手するためであった。それらは何年も前の過去のことであったので、やむを得ず多くの重要な部分で情報に欠くことがあった。我々が日々認識するように、それらの情報は様々な土地や場所を渡りゆく中で変化することもあったからである。

この作品は、その長大さにおいても、大いに尊敬されるものである。というのも、ディオゴ・デ・コウトは、他の作家がその数に及ぶのは稀と言えるこれらの九つの『デカダ集』の中で、九〇もの書を書き記したのみならず、これらすべての歴史叙述が彼一人の書下ろしによるもので、他の書き手をから取ったものではないからである。ここに如実に表される彼の優れた能力とその価値は、たとえ冊数においては勝るとも、リウイ

ウス⁽³⁶⁾さえも及ばないほどである。何となれば、その歴史書の大半は別の人、とりわけポリュビオスの著作から取られたものだからである。ポリュビオスもまた自分の作品に関して、多くの作者がローマ人による征服それぞれについて発表していたものを利用して、その『歴史 *universal historia*』を編集したことを告白している。しかしながら、ディオゴ・デ・コウトはジョアン・デ・バロスが書くに至らなかった時代のインディア領の歴史に、初めて光を当てた人である（フェルナン・デ・カスターニエーダが記したヌーノ・ダ・クレーニャ⁽³⁷⁾の統治初期に関するものを除くとはあるが―本文中挿入句）。ジョアン・デ・バロスの第四の「デカダ」はヌーノ・ダ・クレーニャの統治で終わり、随分経ってから刊行された。⁽³⁸⁾

この作品を完全に仕上げ、簡略に東洋の情報を知らしめるため、「コウトは」もう一冊の書物、すなわち『インディア史梗概 *Epilogo da historia da Índia*』を編集した。ここでは、我々の要塞一つ一つについて、そこで生じた主要な出来事を含めて扱われている。我々の「これまでの」歴史家たちが書き洩らしたこと、その後新たに生じたことなどがその内容である。かくして、この書物では、東洋の歴史、交易、政体に関することすべてが要点整理されており、非常に明朗かつ簡潔にこの網要に合った文体を採用している。演説の形式においても、一層雄弁であった。というのも、彼の『デカダ集』からも理解される以上に、彼の時代にゴアに入城した総督や副王たちの大半のために、演説を「代理で」作成するために選ばれたということからも、少なからず明白である。しかしそれは、ここで用いられている単なる文体や装文によるものではない。そこで言われることの真実さ、率直さで際立っている。演説のいくつかは出版されているが、彼がその著者であることは否定されない。

ディオゴ・デ・コウトには若い頃から、祖国の公益に対する情熱が備わっていた。そこに天性の理解力や経験が加わって、共同体の政治、と

りわけ彼が属していたインディア領のそれに不都合なことが生じる理由を彼に考えさせた。そこには国王が不在で、高級官僚たちの不正な行いが無秩序を増幅させていた。この悪を是正するべく、まだ国王ドン・セバスチャンが存命であった頃に、『老練なる兵士 O Soldado pratico』という一書物を書き記した。それは「対話」の形式で、新たに選任された副王が、その時自らの請願のために宮廷内に居合わせたインディアの老兵と話をし、というものである。それは〔副王のインドへの〕渡航にとって重要な情報、王室国庫の運営に関すること、あの〔インディア〕領の軍隊の状況を知るため、これらすべての事柄において、礼儀正しく簡潔に、何を遵守し、何を避けるべきか、例や基本的な理由を挙げながら説明される。というわけで、この書物はあの〔インディア領の〕政府にとって、非常に優れた導入書なのである。しかしながら、この作品が完成する前に、その原書は盗難に遭い、仕方なくして、当〔ポルトガル〕王国に著者の名前のない状態で到着した。そこで何種類かの写本が作成され、それを入手した人には高く評価された。一六一〇年、コウトは友人からそれを知らされ、この作品を書き直すことにした。というよりもむしろ、新たに書いたと言える。その会話の中に、すでにインディアで総督であった人と、同地で老練な兵士であった人を登場させ、二人ともある財務官の家での〔インディア〕領に関する話を話し合っている。そこでは、当世の問題に合わせ、大変な熟慮と深慮が込められている。それはその土地を統べる者に手引きとなるだけではなく、その土地に関していつの時代も正しい情報を明確に示している。この作品は、アレシケール侯爵³⁹に献じられたもので、オリジナルはコウトが託したエヴォラの教会聖歌隊指揮者のマヌエル・セヴェリン・デ・ファリアの文庫にある。

この故国の名譽に対する情熱は、ドミニコ会士のパードレ・フレイ・

ルイス・デ・ウルレッタ⁴⁰が著したものを弁駁する目的で一冊の書物を彼に書かせた。〔ウルレッタの書は〕我々が俗にプレスデ・ジオアンと呼ぶエチオピア王国の歴史と政治についての記録で、そのパードレは東洋に関する僅かな知識でもって、インディア領の歴史を読むことなく、この〔ポルトガル〕王国の歴史すら読むことなく書いたものであった（それはあたかも森とバレンシアの快楽に囲まれて、それを話し、彼が信じる一人の男以外には会うこともなく書かれたものようである―本文中挿入句）。その本は驚くべき内容の、大胆な物語ではあるが、歴史の真実に全く反する多くのことを語る。イエズス会のパードレ・フェルナン・ゲレイロやニコラオ・ゴディーニョ⁴¹が詳細な弁駁をもつてすでにパードレ・ウルレッタに反論したが、ゴアにいるイエズス会のパードレ達はディオゴ・デ・コウトに、この王国の名譽のために、やはり反論するように依頼した。すでに納骨堂に半分身を沈めたような状態であったが、コウトはそれを実行した。しかしながら、魂に大変な活力がみなぎっていたので、肉体の力はかけているように見えたが、理解力は完璧に近づいていった。インディア領の〔イエズス会の〕パードレ達はブラガ大司教のドン・アレシシヨ・デ・メネゼス⁴²の元へ、作者の依頼にもとづいて、その本をもたらしした。これらに時間を取られたために、インディア領の交易を明らかにするために開始し、そのままになっていた他の仕事を終えることができなかつた。この章では東洋のあらゆる地域へ航海するための天候、季節風、度量衡、通貨、それ〔交易〕に関係するその他のあらゆることを書き記す予定であった。

これらの作品においてディオゴ・デ・コウトは、善良で有能な奉仕者として、一六一六年まで、彼に与えられた才能を隈なく利用し、人生の大半を費やした。その年、二月一〇日の土曜日、神は、それらの作品に見合うだけの恩賞を与えようと、七四歳になる彼を身元に召し給うた。

ディオゴ・デ・コウトは中背の人で、気性は陽気、たたずまいも尊敬に値し、薄茶色の目には生気が宿り、かなり鷲鼻、非常に勤勉であった。その著作の多さが示すように、極めて思慮深く、そのために非常に重要な案件で何度もインディア領副王から諮問を受けた。驚くべきことに、長年インディア領で生活した人にしては、ほとんど欲がない人であった。財産よりも才能や美点に恵まれ、「資産は」名譽ある人として生活するのに不足するというとはなかった。長年連れ添った妻との間には娘が一人いたが、結婚前に亡くなった。それゆえ、彼の血脈は残されなかった。古人であればそれを不幸と捉えたであろう。しかしながらそれほど悪いことでもなかった。古人が大きな幸運と考えたもの、すなわち他人に起きたことがらを書き「歴史記述」、彼自身が記述される材料を提供する「軍役」という幸運を引き出すことができた。

それゆえ彼の肖像画の足元に、あの二行対句を描いたのは理由があったのであった。彼は不滅の存在として、その『デカダ集』には彼の為に次のように印刷された。

— Exprint effigies, quod solum in Cesare visum est.
Historiam calamo tractat, & arma manu.—

—この絵を見よ。カエサルにのみ見られること。歴史のペンと共に、武器も持つ—。

三 第一の巻「第四デカダ」(翻訳)

第一の書

【第一章】総督ドン・エンリケ・デ・メネゼスの死により、マラッカ司令官の任にあったベ「ド」ロ・マスカレーニヤス⁽⁴⁴⁾がインディアの統治を継承した次第。財務長官アフォンソ・メシア⁽⁴⁵⁾が第三継承者の箱を開け、ロポ・ヴァス・デ・サンパイオ⁽⁴⁷⁾が継承に至った次第。

【第二章】アフォンソ・メシアがインディアをロポ・ヴァス・デ・サンパイオに引き渡した経緯。総督「サンパイオ」がゴアへ出発した次第。バカノール⁽⁴⁹⁾「岩礁」におけるサーモリーの艦隊に対する大勝利について。【第三章】総督がその町の司令官であるフランシスコ・デ・サと共に、ゴアに到着したこと。「ゴアのポルトガル人が」総督をゴアに迎えようとしなかったこと。「総督が」数人のカピタンを外地「各要塞」へ派遣したこと。総督がオルムズに出発した次第。

【第四章】メツカ海峡⁽⁵¹⁾において、エイトール・ダ・シルヴェイラ⁽⁵²⁾の身に生じたこと。マツサワ諸島「エリトリア沿岸」に向かった経緯とドン・ロドリゴ・デ・リマ⁽⁵³⁾をプレステ・ジョアン⁽⁵⁴⁾の元「エチオピア」へ迎えに行くよう命じた次第。オルムズまでの航海において、彼「サンパイオ」の身に生じたこと。

【第五章】オルムズまでの航海において、エイトール・ダ・シルヴェイラの身に生じたこと。総督がプレステ・ジョアンからの使節を迎えた次第。

【第六章】アフォンソ・メシアが総督ペ「ド」ロ・マスカレーニヤスをマラッカへ迎えに行かせた次第。そして彼が知らせを受け取った後におこなったこと。マルティン・アフォンソ・ジュザルテ⁽⁵⁵⁾とフランシスコ・デ・サの身にその旅で生じたこと。

【第七章】エイトール・ダ・シルヴェイラがメツカから来るナウ船団を待つためにオルムズへ出発した次第、デイーウの司令官であるメリク・アズ「マリク・アヤーズ」⁽⁵⁶⁾があの要塞をポルトガル人に譲渡することを図った次第。あの島の来歴、モーロ人⁽⁵⁷⁾がああ王国を征服した時のことについて。メリク・アズとの「交渉」で、エイトール・ダ・シルヴェイラの身に生じたことについて。

【第八章】ハグ・マムデー「アーガー・マフムド」⁽⁵⁸⁾がその要塞をエイ

トール・ダ・シルヴェイラに譲渡させぬよう、メリク・サカ（マリク・イスハーク）⁽⁵⁹⁾に翻意させたことについて。彼（シルヴェイラ）がチャウルへ何の成果もなく立ち去ったことについて。ハグ・マムーデが裏切りにより要塞を手に入れ、カンバヤの王にそれを引き渡した次第。
【第九章】本（一五）二六年、「ポルトガル」王国から出発した艦隊について。国王が命じた新しい継承（人事配置）について。財務長官のアフォンソ・メシアが第一（継承者の）箱を開け、そこでロポ・ヴァス・デ・サンパイオが就任したこと。
【第十章】総督（サンパイオ）が、コチンにおいて行ったこと。「ポルトガル」王国へと出発したナウ船団について。国王ドン・ジョアンがアビシニア⁽⁶¹⁾の使節を迎えた次第。

第二の書

【第一章】マラッカ王国・諸王の起源と始まり。マファメデの法を受け入れた時代について。ビントン島⁽⁶²⁾に関する基礎と記述について。
【第二章】総督（ペ）⁽⁶³⁾ロ・マスカレニーヤスがビントンへ出発した次第。総督がパハンの王の艦隊を打ち破った次第。我々を待ち受けていた河口での大変厄介な作業について。
【第三章】敵（ビントン側）がフェルナン・セラオン⁽⁶⁴⁾のナヴィオ船を危険に陥れた次第。同船が見舞われた危険について。総督が「セラオンの船を」救い、ビントンの町を襲い、陥落させた次第。
【第四章】ロポ・ヴァス・デ・サンパイオの統治に関するインディアの人々の騒動について。ルーム人のガレー船団を探す準備をした次第。
【第五章】コチンに到着するまでにペ（ド）ロ・マスカレニーヤスの身に生じたこと。アフォンソ・メシアが彼の上陸を阻止した次第。カンヌール⁽⁶⁶⁾に起きたこと。（ペ（ド）ロ・マスカレニーヤスが）ゴアに向けてカトゥ

ル⁽⁶⁷⁾（權船）で出発した次第。

【第六章】総督ロポ・ヴァス・デ・サンパイオがペ（ド）ロ・マスカレニーヤスについての知らせを得てしたこと。港口で彼（ペ（ド）ロ・マスカレニーヤス）を待つよう命じ、手錠をかけて、カンヌールまで輸送した次第。

【第七章】シャウル⁽⁶⁸⁾の司令官であるクリストヴァン・デ・ソウザがロポ・ヴァス・デ・サンパイオに宛てて書いた、ペ（ド）ロ・マスカレニーヤスに関すること。捕縛されたオルムズの宰相ラス・シヤラフォ（ライス・シヤラフツデイン）⁽⁶⁹⁾がゴアに到着した次第。ペ（ド）ロ・マスカレニーヤスがロポ・ヴァス・デ・サンパイオに伝えた要望について。
【第八章】ふたりの総督の諸事についてゴアで起きた反抗。エイトール・ダ・シルヴェイラとディオゴ・ダ・シルヴェイラ⁽⁷⁰⁾がペ（ド）ロ・マスカレニーヤスに味方すべく乗り出した。

【第九章】ペ（ド）ロ・マスカレニーヤスがゴアの議員とフィダルゴらに送った抗議について。彼らが抗議内容をロポ・ヴァス・デ・サンパイオに提出した次第。

【第一〇章】ロポ・ヴァス・デ・サンパイオがペ（ド）ロ・マスカレニーヤスからの抗議に対して答えたこと。

【第十一章】ペ（ド）ロ・マスカレニーヤスの一味がロポ・ヴァス・デ・サンパイオを捕らえようとした次第。そのことに関して持たれた諸会合について。ロポ・ヴァス・デ・サンパイオが全員を捕らえた次第。

第三の書

【第一章】フランシスコ・デ・サの遠征中に起きたこと。ジャワ島に関する記述について。マルコ・ポーロの大ジャワ・小ジャワについて。フランシスコ・デ・メロ⁽⁷²⁾がアチエの港口でトルコ人たちのナウ船を降伏さ

せた次第。

【第二章】ドン・ガルシア・エンリケスがティドーレの王と和解し、彼〔ガルシア・エンリケス〕がすぐにこれを破つた次第。この王が亡くなった次第。〔医者〕が毒を与えることにより幫助した疑いについて。

【第三章】モルッカへの遠征中にドン・ジョルジ・デ・メネゼスの身に生じたこと。パプア諸島を発見した次第。カステイリヤを出発してモルッカ諸島に向かった艦隊について。〔モルッカ諸島〕到着に至るまでの航路について。

【第四章】ドン・ジョルジ・デ・メネゼスがモルッカに到着した次第。カステイリヤ人たちと一時休戦したが、その和平がすぐに破れた次第。バヤノ王が逝去し、その兄弟であるアヤロが継承した次第。ロフの王が彼の港にいたポルトガル人を殺害し、騙してガレー船を拿捕した次第。

【第五章】ドン・シマン・デ・メネゼスがベ〔ド〕ロ・マスカレーニャスを解放した次第。ロポ・ヴァス・デ・サンパイオへの要求について。ポルトガルを本「一五」二七年に出発した艦隊について。そのうち二隻がサン・ロレンソ島〔マダガスカル〕で遭難した次第。

【第六章】トルコのスレイマンがポルトガル人に対して差し向けた艦隊について。司令官の間での諍いについて。提督〔サルマン・レイス〕が殺害され、艦隊が解体した次第。

【第七章】アントニオ・デ・ミランダ・デ・アゼヴェードがベ〔ド〕ロ・マスカレーニャスに服従すべく与えた署名入り書簡について。そのアントニオ・デ・ミランダとクリストヴァン・デ・ソウザがふたりの総督間の問題について合意したこと。

【第八章】ロポ・ヴァス・デ・サンパイオに調停案を見せた次第。彼〔サンパイオ〕は、これを達成することを誓い、係争中の問題について裁定されることになっているコチンに出発した次第。カンヌールでベ〔ド〕

ロ・マスカレーニャスとの間に起きたこと。

【第九章】コチンで総督たちの間に生じた意見の相違について。ロポ・ヴァス・デ・サンパイオの側に立つ裁定者が二人増えた次第。その後起きたこと。

第四の書

【第一章】新たに加えられた判事たちについて。ロポ・ヴァス・デ・サンパイオに対して判決が出された次第。ベ〔ド〕ロ・マスカレーニャスが〔ポルトガル〕王国へ向かつて乗船した次第。

【第二章】マルクの司令官ドン・ジョルジとドン・ガルシア・エンリケ〔ス〕の間で、彼〔ドン・ジョルジ〕が携えていたある覚書〔⁸⁴ケ〕の間に、彼〔ドン・ジョルジ〕が求めていたある覚書〔⁸⁵ケ〕に關して生じたこと。そして彼がマラッカに救援を求め、ドン・ガルシアを収監した次第。

【第三章】ドン・ガルシアの仲間たちが彼〔ガルシア〕に、ドン・ジョルジを捕えるように唆した次第。そして彼〔ガルシア〕がそれを実行し、要塞に籠城した次第。

【第四章】ドン・ジョルジの友人たちが、その収監を知って実行したこと。彼が解放されるまでに生じたこと。ドン・ジョルジがボルネオに派遣した者たちに生じたこと。

【第五章】総督がコチンに滞在していた間に対応した様々なこと。外洋へ派遣した艦隊について、ドン・ジョアン・デ・サがカリカットの一艦隊に対して挙げた大勝利について。クリストヴァン・デ・メンドンサがオルムズ要塞に入城した次第、そして宰相ラス・ハムデ〔⁸⁸ライイス・アフマド〕の死について。

【第六章】紅海の海峡においてアントニオ・デ・ミランダの身の上生じたこと。そして獲得した戦利品について。

【第七章】シマン・デ・ソウザ・ガルヴァンがマルクへの途上、思いがけない天候でアチエの港に着岸した次第。アチエの一艦隊とそこで交えた激しい、驚くべき戦い、そこで彼〔ガルヴァン〕が斃れ、ガレー船が掠奪されたこと。

【第八章】ゴンサロ・ゴメス・デ・アゼヴェードがモルッカへ向かった次第。バンドへ到着し、そこでドン・ガルシア・エンリケスとの間に生じたこと。ティドレーにアルバロ・デ・サヤベドラ・セロン⁸⁹がノヴァ・エスパルニャから出発して到着した次第。ドン・ジオルジと彼の間に生じたこと。

【第九章】オルムズで越冬したアントニオ・デ・ミランダの身の上に生じたこと。デイオゴ・デ・メスキータがカンバヤの艦隊の捕虜になり、モロロ人になるべく、射石砲一基の中に入れられたこと、彼が堅持した偉大な不屈の精神について。この艦隊がエンリケ・デ・マセードと戦い、そこで行われた激しい戦闘について。

【第一〇章】マルティン・アフォンソ・デ・メロ・ジュザルテに遠征中生じたこと。ベンガルの海岸で難破した次第、捕虜になるまでに経験した多大な労苦について。

第五の書

【第一章】ポルトガル国王ドン・ジョアン〔三世〕が、インディア総督としてヌーノ・ダ・クーニャ⁹¹を派遣した次第。その遠征で生じたことについて。

【第二章】総督ヌーノ・ダ・クーニャの僚船に生じたこと。彼がサン・ロレンソ島〔マダガスカル〕で遭難した次第。マヌエル・デ・ラセルダ⁹²の一隊の兵士たちの身の上に生じたことについて。

【第三章】コチンを出発し、チャトウア川⁹³で遭難した我等の一艦隊につ

いて。総督ロポ・ヴァス・デ・サンパイオがコチンへ出発し、サーモリーの大艦隊を敗北させた次第。

【第四章】総督ロポ・ヴァス・デ・サンパイオがポルカ⁹⁴のアレルを打ち破った次第。〔ポルトガル〕王国から出発した艦隊について。コチンに到着するまでに航海中生じたことについて。

【第五章】総督ロポ・ヴァス・デ・サンパイオが外洋を巡航するカンバヤの一艦隊について報告を受けて出陣し、それと戦って完膚なきまでに打ち破った次第。

【第六章】エイトール・ダ・シルヴェイラがカンバヤの海岸でおこなった戦闘。バサインの市街、ターネーやボンバインその他の町々を破壊したこと。総督ロポ・ヴァス・デ・サンパイオがゴアにおいておこなったこと。マラバルの地域で生じたこと。

【第七章】オルムズの司令官クリストヴァン・デ・メンドンサが〔ポルトガル〕王国へアントニオ・テンレイロ⁹⁵を陸路でガレー船の情報伝えるために送った次第。この男がアラビアの砂漠を横断しておこなった旅。そして王国へ到着し、国王はラス・シャラフォを捕えるためにマヌエル・デ・マセードをオルムズへ派遣した次第。

【第八章】ガルシア・デ・サ⁹⁶が到着するまで、マラッカにおいて生じたこと。アチエ王が自分たちの港に何隻かのナヴィオ船を捕まえて来ることが可能かどうか知るために、ペロ・デ・ファリアに対して用いた策略について。その他に生じたこと。

【第九章】アチエの王が計略を用いてマヌエル・パシエコ⁹⁸のガレオン船を襲った次第。マラッカのシナヤ・デ・ラヤ・シエリ⁹⁸がアチエ人と共謀した密約が発見され、彼が処刑された次第。

注記 訳文中の「」内は訳者による補足。

【解題参考文献】

- Maria Augusta Lima Cruz, 'Da construção historiográfica de Couto: Os trabalhos forçados do editor', in Loureiro & Cruz (eds.) 2019, pp. 97-115.
- José Manuel Garcia, 'Diogo do Couto, cronista e guarda-mor da Torre do Tombo do Estado da Índia', in Loureiro & Cruz (eds.) 2019, pp. 27-41.
- Rui Manuel Loureiro, *A Biblioteca de Diogo do Couto*, Macao: Instituto Cultural de Macau, 1998.
- Rui Manuel Loureiro & M. Augusta Lima Cruz (eds.), *Diogo do Couto: História e intervenção política de um escritor polémico*, Ribeira: Edições Húmus, 2019.
- Ana Dulce Seabra, 'Frei Adeodato da Trindade, editor e censor de Couto', in Loureiro & Cruz (eds.) 2019, pp. 117-144.
- 【註】
- (1) Diogo Barbosa Machado, *Biblioteca Lusitana*. Lisboa: Officina de António Isidoro da Fonseca (vol. 1); Officina de Ignacio Rodrigues (vols. 2 & 3); Officina Patriarcal de Francisco Luis Ameno, 1741-1759. Vol. 1, 648-649; Vol. 4, 98.
- (2) Fernão Lopes de Castanheda (c. 1500-1559). 一五二八年から三八年までのインディア領に滞在し、東南アジア各地を転戦。ポルトガルに帰国後、『*História do descobrimento e conquista da Índia pelos portugueses*』を刊行した。
- (3) Gaspar Correia, *Lendas da Índia*. Rodrigo José de Lima Felner (ed.), 4 vols., Lisboa: Academia Real das Ciências, 1858-1866; Fernão Lopes de Castanheda, *História do descobrimento e conquista da Índia pelos Portugueses*. 8 vols., Coimbra: João da Barreyra (vols. 1, 6-8); João da Barreyra & João Alvarez (vols. 2-5), 1552-1561. 新装Pedro de Azevedo & P.M. Laranjo Coelho (eds.), 8 vols., Coimbra: Imprensa da Universidade, 1924-1933.
- (4) Giovanni Battista Ramusio, *Navigazioni e viaggi*. 3 vols., Veneta: Stamperia de Giunti, 1550-1556.
- (5) Garcia da Orta, *Colóquios dos simples e drogas (...)*. Goa: Joannes de Endem, 1563. 新版 Conde de Ficalho (ed.), 2 vols., Lisboa: Academia Real das Ciências de Lisboa, 1891-1895.
- (6) *Da Ásia de João de Barros e de Diogo de Couto*. Nova edição, 24 vols., Lisboa: Regia Officina Typografica, 1777-1788.
- (7) *Décadas da Ásia, que tratam dos mares, que descobriaram, armadas, que desbaratao, exercitos, que vencerão, e das accoens heroicas, e façanhas bellicas, que obravao os Portuguezes nas Conquistas do Oriente, escritas por Diogo do Couto,...* 3 vols., Lisboa Occidental: Officina de Domingos Gonsalves, 1736.
- (8) M. Augusta Lima Cruz (ed.), *Década quarta da Ásia*, 2 vols., Lisboa: Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimientos Portugueses & Fundação Oriente, 1999.
- (9) ホーフトの本の継承 Marcus de Jong (ed.), *Década quinta da "Ásia"*, Coimbra: Biblioteca da Universidade, 1937.
- (10) Maria Augusta Lima Cruz (ed.), *Diogo do Couto e a Década 8a da Ásia*, 2 vols., [Lisboa]: Imprensa Nacional, 1993-1994.
- (11) 【訳初編】António Coimbra Martins (ed.), Lisboa: Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimientos Portugueses, 2001. 【改訂編】M. Rodrigues Lapa (ed.), Lisboa: Livraria Sá da Costa, 1937. (英語訳) Timothy J. Coates (tr.), *Dialog of a Veteran Soldier: Discussing the Frauds and Realities of Portuguese India*. Dartmouth: Tagus Press, 2016.
- (12) José Manuel Azevedo e Silva & João Marinho dos Santos (eds.), Lisboa: Edições Cosmos, 1998.
- (13) *Vida de D. Paulo de Lima Pereira*, Lisboa: Officina de Jozé Filipe, 1765. 新編G. Pereira (ed.), Lisboa: Escripitorio, 1903.
- (14) Maria Augusta Lima Cruz, Rui Manuel Loureiro & Nuno Vila-Santa (eds.), *Diogo do Couto orador: Discursos oficiais proferidos na Câmara de Goa*, Albufeira: Editora Arandis, 2016.
- (15) Manuel Severim de Faria (1584-1655). ポルトガルの時事問題を取り扱った *Noticias de Portugal* などの著書を通じて知られるポルトガル人の聖職者について著述家。
- (16) Luís Álvares スペイン＝ポルトガル同君統治時代、リスボンの宮廷で王

- 宮付き説教師として活躍。
- (17) ベージャ公ルイス。マヌエル一世の嫡子で国政に宰相的立場で携わり、その才覚により兄のジョアン三世よりも王位就任が期待されていた。
- (18) *De Institutione Grammatica* (1572). 一五九四年、日本でも通称『本草版ラテン文法』として印刷された。日本語をラテン語の枠組みで解説しようとした箇所が加えられている。
- (19) Manuel Álvares (1526-1583). ポルトガル人イエズス会士の第一世代。一五四五年にイエズス会に入会。
- (20) Cipriano Soares / Suárez (1524-1593). スペインのオカーニャ生まれ。ポルトガルのイエズス会教育施設で修練し、教育に携わり、スペインのブラセンシアで没した。
- (21) António de Portugal, prior de Crato (1531-1595). ベージャ公ルイスの非嫡出子。セバスチャン王がアルカセル・エル・キビールの戦いで行方不明になった後、スペインのフェリペ二世のポルトガル王即位を阻止しようとするポルトガル人貴族たちに担がれ、王位を狙うも敗北した。
- (22) Bartholomeu dos Martyres (1514-90). 一五五九年にブラガ大司教に就任、トレント公会議で活躍。その著作『精神生活綱要』はキリシタン版としても出版された。
- (23) インディア領に渡るポルトガル人が放蕩と不道徳な生活に陥ることを暗示。
- (24) 正しくは一五五九年に出発した。
- (25) 本国帰着は一五七〇年四月、インディアへ再出発したのは一五七一年三月であった。
- (26) Adeodato da Trindade (?-1605). ヨア生まれ。一五六五年にリスボンでアウグステイノ会に入会。コウトの義兄として、リスボンでの印刷事業に従事した。
- (27) 年代記家への任命は一五九五年、同時にインディア領のトルレド・トンボ〔公文書館〕の館長にも任じられた。
- (28) Manuel de Sousa Coutinho インディア領副王（在任一五八八〜一五九二）
- (29) ロウレイロなどの近年の研究ではこの叙述に懐疑的である。
- (30) Convento da Graça. リスボンのサン・ウイセンテ地区に位置する。
- (31) コウトは、プトレマイオス、プリニウスないしそのルネッサンス期の注釈書をしばしば引用し、その誤りを指摘している。
- (32) Matias de Albuquerque (1547-1609). インド副王。一五九一年から九七年まで在位。
- (33) Polybius (c. 200-c. 118 BC). ギリシャ人の歴史家。『歴史*Ἱστορίαι* / *Historia*』の作者として知られる。
- (34) Gaius Sallustius Crispus (86-c. 35 BC). 共和制ローマの政治家で、引退後に自らの戦闘記録である*Bellum Catilinae*, *Bellum Jugurthinum*などを記した。
- (35) エジプト南部アスワンあたりからスーダンにかけての地方の名称。
- (36) Titus Livius (64/59 BC-AD 12/17). 帝政ローマの歴史家。『ローマ建国史*Ab Urbe Condita*』の作者として知られる。
- (37) Nuno da Cunha (c. 1487-1539). 一五二九年から三八年までインディア領総督として在任。
- (38) João Baptista Lavanha (c. 1550-1624) が一六一五年に刊行。
- (39) Diego de Silva e Mendonça (1564-1630). スペインのエボリ公爵家出身貴族。一六一七年から二一年まで、ポルトガル副王を務めた。詩人としても知られる。
- (40) Luis de Utrera. スペイン人のドミニコ会士。『*Historia eclesiastica, politica, natural y moral, de los grandes y remotos reynos de la Etiopia, Monarchia del Emperador, llamado Preste Juan de las Indias* (1610)』の著者で、刊行当時からその記述が「想像」であることが批判された。その背景には、アジア宣教をめぐるポルトガル系のイエズス会士との対立があったことが言われる。
- (41) Fernão Guerreiro (1550-1617). リスボンに滞在して、日本を含む世界各地のイエズス会の布教の歴史を記した。
- (42) Nicolao Godinho (1559?-1616). 一五七三年にイエズス会に入会。海外布教には参加せず、ヨーロッパにおいて東インド、とくにアフリカでのイエズス会の宣教の歴史を記した。
- (43) Aleixo de Meneses (1559-1617). リスボン宮廷でのセバスチャン王の近

- 侍を経て、アウグステイノ会修道士となり、コインブラ大学で履修。一五九五年ゴア大司教に着任。一六〇七年から二年間、インディア総督を兼ねる。ポルトガルへ帰国後、一六二二年から一七年までブラガ大司教、一六二二年から一五年までポルトガル副王を務めた。
- (44) Pedro Mascarenhas.
- (45) Afonso Mexia. マヌエル王の宮廷で一五二二年にインド財務長官に任命された。
- (46) インディア領副王ないし総督が任期中中に亡くなった場合に備えてあらかじめ本国から後継候補が指名され、その名を納めた箱が総督の死後に開封されることになっていた。第三の箱が開封されたことを指す。
- (47) Lopo Vaz de Sampaio. インディア領総督。一五二六年から二九年まで在任。一五三四年にリスボンで死亡。
- (48) 現在のカルナータカ州にある。
- (49) 現地語で「王」を意味する。カリカットの支配者。
- (50) Francisco de Sá. マラッカへ向かった。
- (51) 海路でメッカに向かうために通る紅海南端のバープ・アル・マンデブ海峡。ポルトガル語文献では「紅海の海峡」とも呼称された。一五一七年にエジプトを征服して、アラビア半島と紅海を領域に加えたオスマン帝国との対抗上、この海峡をポルトガル人は非常に重視したため、単に「海峡」でも意味をなした。
- (52) ポルトガルのインディア領の著名な軍人貴族。カモンイスの友人として知られる。
- (53) 一五一五年にブレステ・ジョアン王の元に派遣された外交使節大使。
- (54) ソロモン朝後期の君主レブナ・デングル（在位一五〇八〜一五四〇）石川博樹「選択される過去 北部エチオピアのキリスト教徒の歴史認識」永原陽子編『生まれる歴史、作られる歴史 アジア・アフリカ史研究の最前線から』刀水書房、二〇一一年、四頁。
- (55) Martin Afonso de Mello Jusarte. モルディブへ向かった。
- (56) Malik Ayyāz.
- (57) ポルトガル語文献でイスラム教徒を意味する。
- (58) インド側のペルシア語史料にはデューウ側の提督として「マフムード・アーガー Mahmūd Aghā」という人名が在証できる。
- (59) Malik Ishāq. マリク・アヤーズの息子。
- (60) グジャラート地方のムスリム政権アフマド・シャーヒー朝君主スルターン・バハードウル（在位一五二六〜一五三七）を指す。
- (61) ブレステ・ジョアンの支配地域。
- (62) Binão. 現在インドネシアのリアウ諸島の一部。マレー半島の南東沖に位置。一五二一年、マラッカから逃れたスルタンが都を置いた。
- (63) Pão. マレー半島中部。旧マラッカ王国の支配地域。
- (64) Fernão Serrão. 河口から川を遡上するために、防護柵を除去するのに遣わされた。
- (65) Rumes. オスマン帝国の人々を指す。
- (66) Cananor. 現在インドのケララ州の沿岸に位置。
- (67) Canur. プラバール海岸で使われていた軽量の權船。Sir Henry Yale, *Hobson-Jobson: A glossary of colloquial Anglo-Indian words and phrases, and of kindred terms, etymological, historical, geographical and discursive*. New ed. edited by William Crooke. B.A. London: I. Murray, 1903, p. 175
- (68) Christovão de Sousa. 両総督の継承争いにおいて、当初はロポ・ヴァス・デ・サンパイオの側に立っていた。
- (69) Rax Xarrato. Ra'is Sharaf al-Dīn. オルムズの宰相。ポルトガル支配への反乱首謀と貢納金の不履行により捕縛され、ポルトガルへ送られた。バーレーンを統治したRax Bardadinは義兄弟の関係。Da Asia de João de Barros e de Diogo de Couto. *Década IV, Liv. VI, Cap III, f. 19.*
- (70) Diogo da Silveira. オルムズに派遣されていた艦隊の司令官。ゴアに帰還後、ロポ・ヴァス・デ・サンパイオの継承に反対した。
- (71) Francisco de Sá. 一五二六年にスンダでの要塞建造のため艦隊を率いてゴアを出発した
- (72) Francisco de Mello. フランシスコ・デ・サによって、スンダの要塞建設について報ずるためにマラッカの司令官のもとに送られ、その途中でメッカに向かう nau を拿捕した。

- (73) Garcia Amriquez. ジョルジ・デ・メネゼスの前任のテルナテ要塞司令官。
- (74) Tidore. 現在インドネシアのモルッカ諸島にある島。のちにポルトガル勢力と敵対し、スペイン勢力と組む。
- (75) Jorge de Menezes. 一五二六年にモルッカ司令官に任命される。
- (76) Bayano. Bohayat. 当時のテルナテのスルタン。治世は一五二二～一五二九年。
- (77) Ayalo. Dayalo. 治世は一五二九～一五三三年。
- (78) Lohu. Lubuh. スマトラ島北部。
- (79) Sinão de Menezes. 当時、カンヌールの司令官。クリストヴァン・デ・ソウザの働きかけによって、マスカレーニャスを釈放した。
- (80) Turco Solimões. o Turco Solimão. オスマン帝国君主スレイマン一世（在位一五二〇～一五六六年）。
- (81) Solimão Rax. Selmān Re'is. 本文には名前が記されないが、マムルーク朝のスエズ艦隊提督からオスマン帝国に転じた。紅海およびアラビア半島内陸部における作戦を指揮したが、軍内の紛争により、一五二七年末に暗殺された。
- (82) Antonio de Miranda de Azevedo. 当時の海軍司令官
- (83) Jorge de Menezes. 一五二六年にモルッカ司令官に任命される。
- (84) Garcia Henriques. ジョルジ・デ・メネゼス前任のテルナテ要塞の司令官。
- (85) ジョルジが副王マスカレーニャスの指示によって、離任するガルシアがボルネオ経由の帰路をとるよう望んだ（バンダ経由より早く、この後に出てくるスペイン人がボルネオ方面に進出するのを阻止する意味もあった）のに対し、ガルシアがバンダ経由航路をとることを望んだ結果、両者は対立するに至った。
- (86) ヴァスコ・ダ・ガマの書記官であった同名の人物とは別人。
- (87) Cristóvão de Mendonça. スマトラ近海の探検家として知られる。オーストラリアを発見した可能性が指摘されている。
- (88) Guazil Rax Hamede. Vazir Ra'is Ahmad. オルムズ王国（サルグル朝）君主ムハンマド・シャーの宰相（ヴァズイール≡Port. Guazil）ラーシド・アフマドを指すか。Dejanirah Couto, 'Reações anti-portugais dans le Golfe Persique (1521–1529)', In: Luis Filipe F. R. Thomaz (ed.), *Aquém e Além da Taprobana: Estudos luso-orientais à memória de Jean Aubin e Denis Lombard*. Lisbon: Centro de História de Além-mar, Faculdade de Ciências Sociais e Humanas, Universidade Nova de Lisboa, 2002, pp. 214–215.
- (89) Alvaro de Sayavedra Cerón/Alvaro de Sayavedra Cerón. ヌエバ・エスパニーヤ副王エルナン・コルテスの従弟。太平洋探検のために派遣される。一五二七年メキシコを出発、ハワイなどを発見し、一五二八年にモルッカ諸島のティドレー島に到着した。大量の丁子を入手し、ヌエバ・エスパニーヤへ帰還しようとしたが、太平洋で遭難し、ティドレー島へ帰還。再び一五二九年にヌエバ・エスパニーヤ目指して出帆するも再度遭難し、サヤベドラは死亡した。
- (90) メスキータは一五二八年八月、このカンバヤ艦隊との海戦で捕虜になった後、同王国（アフマド・シャーヒー朝）に留置され、一五三五年一月に締結された同王国とポルトガル側との条約をめぐる交渉で、両者の間を往来。この後、ポルトガル側に戻り、一五三七年二月、カンバヤ軍との戦闘に参加。アフマド・シャーヒー朝に関する彼の報告書は一五三五年一月一七日までにディーウで書かれたと推測される。報告書の写本は複数あるがポルトガル国立公文書館トルレド・トンボ（Coleção de São Vicente, liv. 11）の♀の（*Capitolo das cousas que se passaram no Reino do Guzarate depois da morte do Solan Modjfar* 「ソルタン・モダファールの死後グザラテ王国に生じた諸事に関する章」）が、最もオリジナルに近いと考えられる。この報告書は *Chronica Geral dos Sucessos do Reyno de Guzarate a Om. Chinnao Cambaya*（『カンバヤと呼ばれるグザラテ王国年代記』）として一九八一年に刊行された。
- (91) インディア領総督。在任一五二九年から三八年。
- (92) Manuel de Lacerda. ポルトガルのインディア領の有力軍人でインド＝ヨーロッパ航路で船長として活躍。前年にマダガスカルで遭難し沈没したコンセイサオン号の船長。
- (93) ケーララ州の Chetwai River.
- (94) プラッカド。マラバル海岸にあった小王国。

- (95) António Tenreiro. 後にこの旅のことを（正確に言えば、彼の著書にはこの旅の前に行ったベルシア宮廷への使節行（1523-24）、各地の周遊記（24-25）も載る）記した *Itinerario* の著者として知られる。ベルシヤ語、アラビア語、トルコ語に通じていた。
- (96) Garcia de Sa. 一五一九年から二二年、二二年から二七年まで、二度にわたってマラッカ総司令官を務める。一五四八年にインディア領総督に就任。
- (97) 当時のアチエ王は Sultan Ali Mughayat Syah.
- (98) Sinaya de Raya Chely. マラッカのブンダハラ。

【附記】 本稿は東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点における特定共同研究「モンスーン文書・イェズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究」（代表松方冬子）（二〇一九・二〇年度）の成果の一部である。